

歴史散策 パンフレット

～山崎の麓・野町を歩く～



※散策スポットには私有地が含まれます。個人で散策される際の立ち入りは許可を受けて下さい。



1 玄徳寺

薩摩藩では浄土真宗（一向宗）の信仰は禁止されていました。明治9年（1876）に浄土真宗の禁教が解かれ、明治10年に浄土真宗の布教のために山崎に置かれた説教所が玄徳寺の前身です。

明治12年（1879）に本堂を新築する際、廃仏毀釈で壊され野積みされていた宗功寺の材木を筏で運び、その一部が使われました。玄徳寺の門前には明治17年に架けられた長さ約2.8mの小さな石橋もあります。

玄徳寺の境内には「養安寺椿」と呼ばれる赤い花びらに黄色の芯が出る椿が咲きます。この養安寺椿の兄弟椿とされているのが久富木の「法円寺椿」です。この椿は赤い花びらに白い芯が出る株で現在でも久富木の個人宅に1株残っているそうです。



玄徳寺



養安寺椿

2 山崎小学校

山崎小学校は明治3年（1870）に廃仏毀釈で廃寺となった養安寺の跡地に山崎郷の郷校として始まりました。明治4年には第十六郷校と名づけられました。明治5年に改称された学制により変則小学校となり、明治9年（1876）に山崎小学校と改称されましたが翌10年に西南戦争の影響によって学校の機能が停止しました。明治12年には校舎が改築され学校の機能を取り戻しました。山崎小学校の校庭に現存する棕の木はかつての玄徳寺との境界でした。

山崎小学校の成立以前にあった養安寺の成立年代は不明ですが、寛文年間（1661～1670）には成立していたものと考えられます。本尊は釈迦牟尼仏でした。宗派は曹洞宗で鹿児島市の福昌寺の末寺でした。



大正時代の山崎小学校

3 恵比寿様

山崎の野町には商売の神様として「恵比寿様」が祭られています。もとは野町十字にあり「西向き恵比寿」と呼ばれていました。明治32年（1899）頃に、小学校校庭の南西側付近に移され、現在は玄徳寺前の三叉路に鎮座しています。恵比寿様の移転は明治以降の野町の発展の様子を示しています。

4 飯富神社

飯富神社はかつての郷社で通称「でめじんどん」とも呼ばれていました。祭神は倉稲魂命です。山崎麓と余ヶ城の稲荷神社と愛宕神社、菅原神社の4社が合祀されています。かつての社殿は東橋手前の堤防沿いに桜並木の参道があり、その行き止まりに西向きで神社の鳥居が建っていました。平成18年7月の鹿児島県北部豪雨災害の後に現在地へ移転しました。

5 戦没者鎮魂の碑

ここには明治10年の西南戦争以降に出征した山崎地区の戦没者の御霊を祀っています。戦没者の内訳は以下の通りです。

〈戦没者内訳〉	戦争	年	人数
●	西南戦争	（1877年）	12名
●	日清戦争	（1894年～1895年）	2名
●	日露戦争	（1904年～1905年）	3名
●	日中戦争	（1937年～1945年）	13名
●	太平洋戦争	（1941年～1945年）	64名

6 野町の範囲と町並み

山崎野町の範囲は、旧道の十字路から川内川左岸までが範囲で、十数軒の商店がありました。野町には、焼酎屋・麴屋・油屋・荒物屋・質屋などの業種がありました。これらの店にはそれぞれ業種に応じて札銀が課せられており、扱う商品は郷土や農民の生活に必要な最小限の品揃えでした。

藩政時代には山崎与（組）蔵があったため宿場もありました。宿場の近くの久富木川には「宿場淵」と呼ばれている場所もあります。地頭仮屋は当初宿場付近にありましたが文化11年（1814）に現在地に移転しました。地頭仮屋は明治維新後に山崎村役場となり昭和28年には町制が施行され山崎町になりました。役場庁舎は昭和30年（1955）に宮之城町と合併するまで使われていました。

麓と野町の仕組み

江戸時代の各地の郷は、政治の中心である御飯屋と武家屋敷からなる府元（麓）があり、外縁部には商人や職人が住む野町がありました。野町の行政は別当や横目などの職についた郷士がおこないましたが、町人の中から選ばれた小別当が業務を補佐していました。

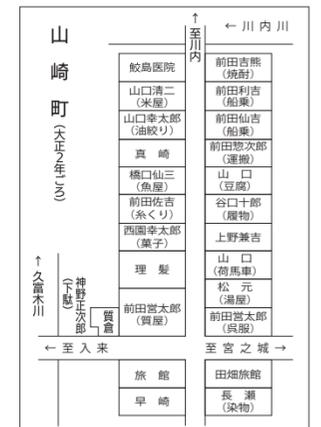
川内川の舟運と交通について

山崎麓の交通は明治23年（1890）に山崎橋が架橋されるまでは渡し舟を利用していました。江戸時代には宮之城・入来・川内・大村・樋脇の各地へ通じる街道が通っていました。

山崎には川内川の舟運を利用して年貢を集積するための与（組）蔵があり物資の流通に舟運が大きな役割を持っていました。年貢以外の流通は山崎からみかんや茶、麻などを積み出し、陶器類や塩、苦汁、馬骨、紙などを持ち込んでいたようです。

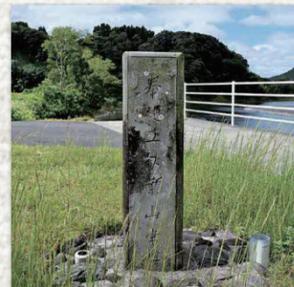
大正2年ごろの町屋の様子

大正2年ごろの町屋の地図では、真崎商店の位置は田畑旅館となっています。今でも古い商家の雰囲気が残っています。藩政時代の野町区画図では空き地となっています。

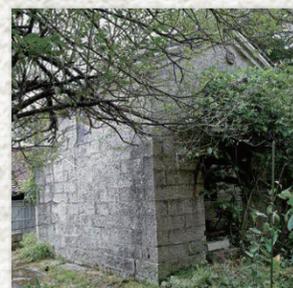


7 秋葉神社遥拝の石塔群

久富木川と川内川の合流地点の下流にある火伏せの神様である秋葉神社（あきば）を遠くから拜んだ場所に建てられた石塔群です。石塔には「奉建立 秋葉山 常燈寛政五年」と彫られています。もとは石塔が数基あったようですが現在は1基残されています。（寛政五年は1793年）



秋葉神社遥拝の石塔



鬼丸整形外科敷地内の石蔵

8 鬼丸整形外科敷地内の石蔵

鬼丸整形外科は、黒肱医院（眼科／内科）跡地です。鬼丸さんは黒肱さんの遠い親戚にあたります。石蔵には屋号が刻まれているが、石蔵がどのように使われたかは不明です。

9 帖佐美行生誕の地

帖佐美行は旧山崎町の出身で、彫金作家として国内外に多くの作品を残し、高い評価を受けています。晩年は文化勲章を受章しました。作品は現在もさつま町役場ロビーをはじめ、各地で展示されています。帖佐美行は現在の川越齒科の周辺で生まれ育ちました。



「田園」昭和40年制作



山崎郷御仮屋跡

10 山崎郷御仮屋跡

江戸時代の山崎郷は、薩摩藩の直轄領で薩摩藩から任命を受けた地頭が治めていました。山崎御仮屋は、当時の山崎郷5ヶ村（山崎・久富木・二渡・白男川・泊野）の政治を行った場所で今で言う町役場でした。

実際の政治は現地の郷士から選ばれた所三役が行っていました。御仮屋敷前の銀杏の木は、文化11年（1814）に御仮屋が野町から現在地に移転した際に植えられたものといわれています。明治維新以後も山崎村役場が置かれ昭和28年には町制が施行された後も庁舎として使用されました。

※所三役とは

所三役とは、組頭、横目の事を指します。組頭は郷士年寄とも呼ばれる郷の政治の責任者で、組頭は郷士の指導や警備を担当し、横目は警察のような犯罪の取締りなどを担当しました。

- 1 玄德寺
- 2 山崎小学校
- 3 恵比寿様
- 4 飯富神社
- 5 戦没者鎮魂の碑
- 6 野町の範囲と町並み
- 7 秋葉神社（あきば）遥拝の石塔群
- 8 鬼丸整形外科敷地内の石蔵
- 9 帖佐美行生誕の地
- 10 山崎郷御仮屋跡
- 11 里村からの疎開記念碑
- 12 浄福寺跡
- 13 家老屋敷群（郷士年寄屋敷）



山崎御仮屋文書

山崎地頭仮屋文書は、山崎村役場（御仮屋跡地）にあった土蔵の中から、当時の玄德寺住職内藤朗玄氏が昭和26年（1951）4月に発見した資料群です。内容としては安永5年（1776）と書かれた帳箱の中に明暦4年（1658）から明治16年（1883）までの約220年間に山崎地頭仮屋で扱った帳簿類約400冊で平成18年4月21日に鹿児島県指定文化財に指定されました。現在は宮之城歴史資料センターに収蔵・展示されています。



山崎御仮屋文書

11 里村からの疎開記念碑

昭和20年（1945）になると、太平洋戦争は激化し内地への空襲が行われるようになり鹿児島県内でも学童疎開が始まりました。同20年5月には当時の里村（現在は薩摩川内市）の小学生450名と教員、父母数名が旧山崎地区（当時の山崎、白男川、泊野）に疎開してきました。当時は食料難で、子供たちはいつもひもじい思いをしていました。校庭に畑を作りイモやカボチャを植えて食料としていたので朝礼はイモ畑の中で行われていました。この頃、赤痢が流行し泊野小学校でも3人の疎開児童が亡くなりました。昭和51年、里村との姉妹町村盟約を契機に記念碑が建てられました。



里村からの疎開記念碑

12 浄福寺跡

御仮屋の北側の高台に天文12年（1543）頃にあったお寺で安養寺の庵といわれています。敷地にある石碑には「祖山浄珍 龍山妙清 天文十年 癸卯小春日」と刻まれています。



浄福寺敷地にある石塔群

13 家老屋敷群（郷士年寄屋敷）

山崎郷の政治の中心となった地頭仮屋の周辺には、山崎郷の上級士族の屋敷がありました。その中でも「所三役」などの役職につける家柄などは世襲で決まっていた。

山崎郷は寛永から明暦（1624年から1657年）の頃に各地から郷士を移住しています。この時移住してきた今村、酒匂、宮路、木下、柳田、有馬、堀、三浦、久米、肥後、帖佐、市来、松下、遠矢、黒肱、中村、黒木、鮫島の諸氏は「十八人郷士」と言われました。現在でも酒匂家、肝付家、今村家など上級士族の屋敷地は石垣などに囲まれて残っています。



肝付家住宅